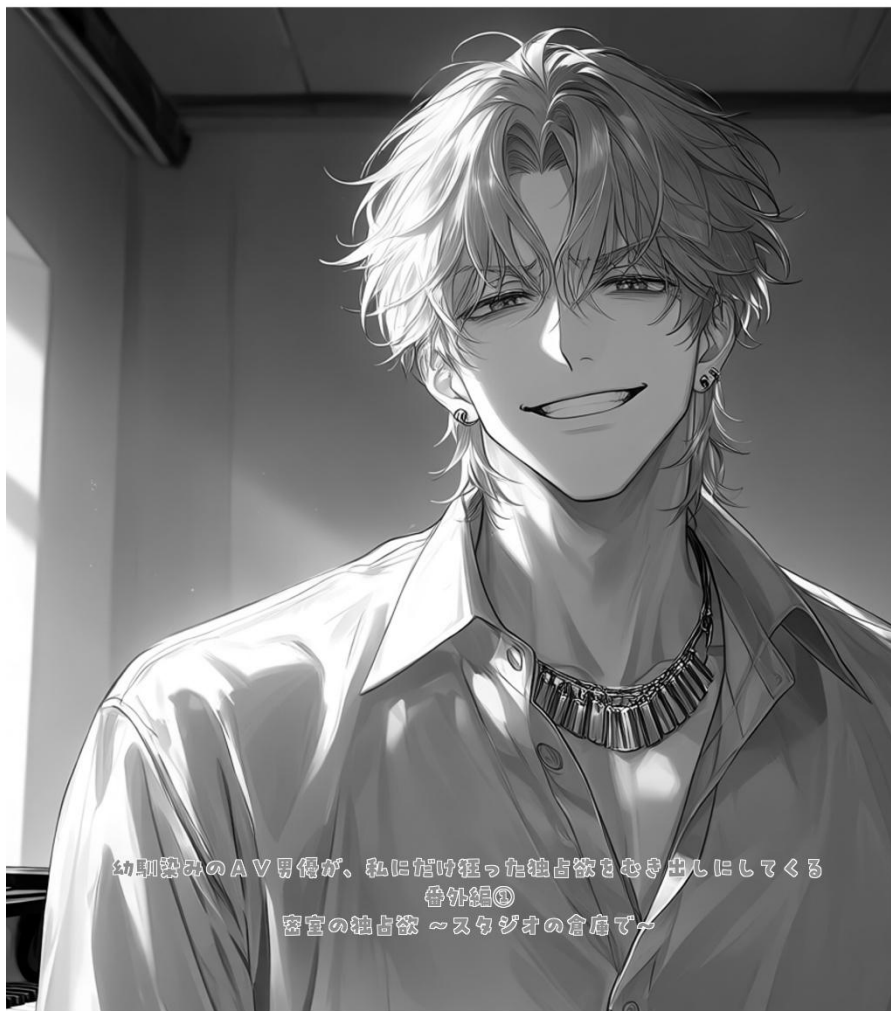




幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる

番外編 体験版



幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った執占欲を巻き出しにしてくる
番外編④
密室の執占欲 ～スタジオの倉庫で～

※画像はPixAIで作っています※

【本作をお読みいただく前に】

本作は、ヒロインを愛するあまり狂った独占欲を見せるヒーローとの、激しく濃厚なロマンスを描いた作品【幼馴染AV男優が私にだけ独占欲を向けてくる】の番外編です。読者の皆様に安心してお楽しみいただくため、以下の要素が含まれることを予めご了承ください。

本編未読でも楽しめる内容になっていますが、より楽しみたい方は本編もぜひご覧ください。

【過激な描写】

作中、ヒーローによる重めの愛撫が含まれます。

シチュエーションおよび、過激な性描写（ポルチオ・中出し）が苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、ご注意の上お楽しみください。

登場人物紹介

・天音 紗良（あまね さら）／アマオト

本作のヒロイン、女性向けAV脚本家

ヒーローとは幼馴染で同業者。テレビドラマの脚本家を目指す、現在はAVの脚本家。

・星川 蓮（ほしかわれん）／レン

本作のヒーロー、人気イケメンAV男優

表向きは幼馴染を装っているが、裏では紗良に対して狂氣的独占欲と執着心を隠し持っている。

・金崎 悠真（かなざき ゆうま）

蓮と同じ現場で働く男優。ビジネスライクな立ち位置!?

【番外編①】

密室での独占欲　くスタジオの倉庫でく

そこは都内にある、業界最大手の成人向けビデオメーカーが所有する大型撮影スタジオ。

天井が高く、コンクリート剥き出しの通路には、衣装ラックや撮影機材が雑然と並んでいる。

脚本家である『アマオト』こと天音紗良あまねさらは、新企画の打ち合わせのために、このスタジオを訪れていた。

（やっぱり、本物の現場は空気が独特だな……）

手元の資料に目を落としながら歩いていた紗良は、ふと、前方の開けたスタジオから漏れ聞こえてくる声に足を止めた。

華やかな照明。何台ものカメラ。ディレクターの指示。

そして――聞き間違えようのない、低く甘く、ひどく淫らな男の声。

『……もつと俺のほう見て。可愛い顔して、中、すごい締めつけてくるね』

心臓がドクン、と大きく跳ねた。恐る恐る視線を向けると、セットのベッドの上で、一人の男が美しい女優を組み伏せているのが見えた。

均整の取れた逞しい背中。汗ばんだ肌。

――レン。

今やこの業界で知らない者はいない、圧倒的な人気を誇るトップ男優。そして紗良の幼馴染だ。

（げえ！ 蓮、なんでいるわけ!?　っていうか、撮影場所がことか、聞いてない！）

紗良は、幼馴染であり人気AV男優のレンこと、星川蓮と女優が絡む姿を視界に入れてしまい、と

つさに顔を背けていた。すぐに、カットの声が聞こえ、お疲れ様でしたーと声がかかる。

……とある出来事をきっかけに、蓮とは一線を越えてしまっている。

それ以来、なぜか時間さえあれば蓮は紗良に迫ってくるようになった。日中は仕事でほかの女を抱いているというのに、夜になっても彼の欲は収まらないようなのだ。

それどころか、まるで飢えた獣のように紗良に襲い掛かってくる。

（蓮だって仕事なんだから、仕事……！）

ドライな現場とはいえ、出演者同士の絡みを目の当たりにすると、胸の奥がキリキリと引き絞られるように痛んだ。

（……私の方の打ち合わせはもう終わったし、早く帰ろう）

紗良は逃げるように踵を返し、早足で通路を歩き出した。

ここから離れたい。その一心で俯きがちに角を曲がった瞬間、正面から歩いてきた長身の男と危う

くぶつかりそうになった。

「おっと、危ない……。つて、アマオト先生？」

少し気怠げな、けれどどこか甘い声には聞き覚えがある。

顔を上げると、そこには女性でもうっとりするくらい美しい顔立ちの青年——かなざきゆうま金崎悠真が立っていた。彼は蓮の後輩であり、最近急速に頭角を現している人気男優だ。

「金崎君。ごめんなさい。前を見ていなくて」

「いえいえ。それより、顔色悪いですけど、どうかしました？」

悠真は紗良の顔を覗き込むと、切れ長の目を少し細めた。彼の視線は、紗良が今歩いてきた通路の先……蓮が撮影しているスタジオの方へ一瞬だけ向く。

「あー……。蓮先輩の撮影、見ちゃったんですね」

「それは、その、たまたま通りかかって」

「無理しなくていいのに。いくら同業者で仕事とはいえ、友人のセックス見るのキツイですよ」

悠真は一步、紗良との距離を詰めた。

「時間あります？ ジュースでもおごりますよ」

会議まではまだ時間がある。紗良は悠真とともに自動販売機に向かい、飲み物を頼むと横のベンチに腰を下ろした。

悠真は特に何かを話すわけではなく、缶コーヒーを開けると丁寧な仕草で飲んでいた。紗良も隣で冷たい紅茶を煽る。喉が潤ってくると、ほっとした気持ち広がった。

「金崎君は撮影？」

「ええ、もう終わりました。疲れました」

紗良はそれに「そうだね」と笑う。体力が必要で、体調管理には厳しい職業なのだ。

「俺、そこまで体力有余ってるわけじゃないんで……連先輩を見習わないと」

「……あれは見習っちゃダメな気がする」

蓮のような獰猛な雄は、そう何人もいたらよくない気がした。

「憧れてるんですけどね。優しいですし義理堅いですし。先生もそう思いませんか？」

悠真が同意を求めるようにこちらを向いた時。

「——おい悠真。俺のに気安く触ろうとしてんじゃないよ」

気付いた時には、紗良は太い腕に肩を抱かれていた。

見上げると、そこにはいつの間にか撮影を終えたらしい蓮が立っている。

シャワーを浴びたあとなのか、髪がまだほんの少し湿っていた。蓮は不機嫌な様子で悠真に釘をさすと、紗良を見下ろしてくる。

「蓮先輩。お疲れ様です。相変わらず仕事完璧で早いですね」

「いいからお前はとっとと帰れ、何をうろちよろしてんだよ。ジムで筋トレでもしてこい」

「はいはい、先輩の助言とあらば、ランニングしてきます。じゃあまた、先生」

悠真は軽い足取りで去っていった。

ベンチに残されたのは、蓮と紗良の二人だけ。とても気まずい雰囲気が流れる。

「蓮……あの、撮影、終わったの？」

「お前は？　なんでここににいるわけ？」

「打ち合わせで……蓮がいるなんて知らなくて」

彼は無言で紗良の腕を掴むと、容赦のない力で引きずり始める。

「きゃっ……！　蓮、痛いってば、どこ行くの……？」

「うるさい。来い」

先ほど打ち合わせを終えた部屋とは真逆の方向に引きずられる。通路の奥にある、薄暗い『機材倉庫』の重い扉を、蓮は乱暴にこじ開けた。

【番外編②】

誤認の代償　く嫉妬に狂った調教ピストンく

「……男性二人に、女性一人の3Pもの……ですか!？」

プロデューサーから渡された新しい企画書を前に、紗良(さら)は思わず声を裏返した。

「今、うちのメーカーで一番売れてる男優さん二人を出演させて、一人の女優を徹底的に貪り尽くす超大型特番を組みたくて。ドロドロした男同士の牽制と、二人に挟まれて狂っていく女性の心理を描けるのは、アマオト先生しかないと思ったんですよ」

顔を上気させてプロデューサーは熱弁するが、紗良の心臓はさつきから嫌な汗をかきっぱなしだった。

(二人が同時に一人の女性をめちやくちやに抱く脚本なんて……なんだか……)

取材と称して幼馴染の蓮(れん)にホテルに連れ込まれた時のことを思い出し、紗良は頬が熱くなってくる。それを隠すためにとっさに脚本を見るふりをして俯いた。

「アマオト先生がいいんです。ぜひお引き受け願えませんかね？」

仕事として依頼された以上、私情で断るわけにはいかない。自分を必要としてくれる人がいるのは、この上なく幸せなことには違いなかった。

「……わかりました。初めてのことなので、構成を考えてみます。またご連絡します」

そう言って持ち帰ったものの、一対一をメインに脚本を書いてきた紗良にとって、本格的な「3P」というシチュエーションは未知の領域だ。

男性二人がどういうポジションで動き、どう絡めば一番エロく見えるのか。それを女性が見て満足できる作品にならなくてはいけない。

(……やっぱ、映像で勉強するしかないよね！)

その日の夜。

紗良はリビングのソファでノートパソコンを開いていた。

仕事なのだからと思い、カメラワークやプレイ内容をメモするために、手書きのメモ帳も用意して画面の前に座る。

再生したのは、業界でも有名な過激3P作品だ。

画面の中では、二人の男優が寄ってたかって一人の女優を玩具のように扱い、代わる代わる口と膣内に肉棒を突き入れている。

『あつ、ああつ……ッ!』

女優の狂ったような喘ぎ声が、静かなリビングに響いた。

「これは明確に男性向けよね……もちろん、男性と一緒に観ても楽しめる作品にはしたいけれど、主体は女性なのだから……」

紗良は必死にメモを取りながら分析する。男優二人の体位の入れ替わり、言葉責めのタイミング。カメラが秘部を映し出す画角。

プロデューサーの企画書には、予定されている男優の名前が載っていた。

イケメン俳優として人気が出始めている二人で、一人はサディスティックなイメージが強く、もう一人は甘々な出演作が多い。

企画書と画面とを交互に見ているうちに、画面の中の男優たちが幼馴染の蓮と悠真の姿に重なって見えてしまった。

「バカバカ私！ 二人が共演なんてするわけじゃないじゃない！」

慌てて深呼吸をしたのだが、今はないというだけで、蓮と悠真の共演はこの先いくらでもあり得る

話だ。

（三人だと男優さんたちはいつもと動きが変わってくるだろうし、蓮に相談してみようかな……。でも、そんな話を振っただけで嫉妬して怒りそうだし……）

どうすべきかと唸っていると、家の扉がガチャリと開いた。こんな夜更けすぎに、勝手に部屋に来る人間なんてたった一人しか紗良は知らない。

合鍵を持っている幼馴染——星川蓮（ほしかわれん）だ。入ってくるなりめっちゃめっちゃ不機嫌な声を出される。

「お前さ、携帯の電源くらい入れておけよな。何回連絡したと思ってんだよ」

集中しようと電源を切っていただけなのに、なぜか怒られて紗良は口を尖らせた。

「勝手に来ないでってば、仕事中なの」

「許可は取ったぞ、見てみろよ」

紗良はしぶしぶスマートフォンの電源を入れた。そこには着信五件、短いメッセージが二十件も来ている。

全部『なにしてるの?』『大丈夫?』『今から行くからな』というような内容だ。

「心配かけてごめん。でも仕事してただけだから……」

「――へえ。なるほどね。ずいぶん熱心に勉強してたようだし、これなら携帯の電源切るのもわかるわー」

紗良が携帯電話をチェックしている間に、蓮はいつの間にか企画書を視界に入れた挙句、再生しっぱなしだった画面と紗良のメモを読んってしまった。

「で、なに、3Pって?」

「いっ……!?!」

冷やかな声に、紗良は飛び上がるほど驚いてパソコンの画面をボタンと閉じた。振り向くと、蓮の

見るからに不機嫌そうな表情がある。

「新企画なの！ 今日、打ち合わせ行ってきた」

「へーえ。それで、こんなにメモ取って、男二人に、めちゃくちゃにハメられてるAV観てたってわけか」

蓮はゆっくりと歩み寄り、ソファの後ろから手を伸ばして、紗良が閉じたパソコンを強引に開かせた。

画面ロックを解除され、さっきまで流れていた動画の静止画が露わになる。

「仕事の資料だから、見なくちゃでしょ！」

「もちろんそうだけど……まさか、オナツてたんじゃないよな？」

蓮が恐ろしいほど意地悪な笑顔になる。紗良の顎を強い力で掴み、無理やり自分の方を上向かせた。

「3P企画の脚本も、嬉々として引き受けたんだろ？ まさか、俺と悠真とのことを想像してたんじ

やないよな？」

「そんなんじゃない！ 私は、ただ——」

「それともさ」

蓮の指先が、紗良の顎から首筋へ這っていく。

「本当は、お前自身が実は二人に同時にめちゃうちゃにされたいとか？ さっきの動画の女優みたい
に」

「ないってば……」

「どうかな。まさか濡れてないだろうな？」

「も……もちろん！」

だが、集中していたとはいえAVを見ていたわけで、紗良は自分が濡れているのを自覚している。
感じていたわけではないが、生理的にどうしようもないことだ。

「紗良はもしかして、俺のだけじゃ満足していなかったのか」

「だから、そういうのじゃないって——」

紗良はどうやら、蓮のなにかのスイッチを押してしまったらしい。まっとうに理由を説明しているのに、なぜか自分が追い詰められていくのを感じていた。

【番外編④】

独占欲の檻　くスーツの残香と秘密の玩具く

「ただいま……紗良、寝てなかったのか？」

紗良さらの家のリビングに現れた蓮れんは、いつもと違って仕立ての良い高級スーツを身にまとっていた。

「おかえり……って言いたいけど……そもそも、ここ私の家なんだけど」

「幼馴染なんだからいいだろ。それに、もういっぱい愛し合った後なんだから、つべこべ言うな」
意地悪な笑顔で言われてしまい、紗良は顔が熱くなる。

「珍しいね、今日はスーツなんだ」

「あー……偉い人たちとの打ち合わせがあって……今回、シリーズが完結しただろ？　プロデューサーから、次の大きなオファーの相談を受けてたんだよ」

「そうなんだ。キャリアアップ？」

「秘密。アマオト先生とタッグ組んでやれって言われていたとしたら、どうするよ？」

「それは……ちよつと気まずいね」

蓮は少し疲れたように髪を掻き上げ、紗良の隣へ腰を下ろした。

いつもと違う格好のせいで、なんだかドキドキしてしまう。ネクタイを緩める指先を見てしまい、それだけで心臓がバクバクと鳴り始めた。

だが、紗良の緊張の理由は、それだけではなかった。

（や、ヤバい……。本当に、どうしよう……!）

蓮が帰ってくる直前。

視聴者アンケートやプロデューサーからの『次はオモチャを使った過激なシーンが欲しい』という要望に応えるため、参考用にもらった最新式のバイブを自室で試そうと試行錯誤していたのだ。

もらったからには使ってみなければと思ったものの、触ったことがなかったため、見た目のリアルさに驚き、動かし方がわからず説明書をじっくり読む羽目になっていた。

試供品が有り余っているからと、たくさんもらった中にローションが入っていたのはわかっていった。

だが、自分で挿入するには気が引けてしまい、クリトリスバイブだけ動かして当ててみた。

評判のいいものだと聞いていたが、あまりの快感にイきかけていたところへ、蓮が突然部屋を訪れたのだった。

合鍵を持たれているのは、こういう時に良くない。

幼馴染だからといって、母親が勝手に蓮に渡してしまったのが原因だ。

蓮の訪問にパニックになった紗良は、衣服を整えるのが精一杯だった。おかげで、オモチャを慌ててソファの下へ押し込み、何食わぬ顔で蓮を迎えたのだった。

そんな焦りなど露知らず、蓮は愛おしそうに紗良の細い腰を引き寄せた。

「紗良……すげえ会いたかった。仕事中止とお前のこと考えてて」

至近距離で浴びせられる甘い言葉。蓮のスーツから微かに香るムスクの香水と、彼自身の熱い体温。

蓮の長い指が紗良の顎を持ち上げ、深く、吸い付くようなリップ音を立てて唇を重ねてくる。何度も角度を変え、舌を割り込ませて口内を溶かすような濃厚なキス。

「ん……っ、蓮、気持ちい……」

あまりの心地よさと彼の瞳の色つばさに完全に骨抜きにされていた。蓮の胸にしがみついて熱い吐息を漏らしてしまう。

もっとキスをしたい。ぎゅっと強く抱きしめられたい。

そう思って、身体力を抜いてソファに深く体重を預けた、その瞬間。

紗良の手が、クッションの隙間に置いてあった小さなりモコンにうっかり触れてしまった。

ブ———……、ブブブブブブブッ!!

低く重い、機械的なバイブレーションの振動音が突然鳴り響く。

それは間違いなく、さっき慌ててソファの下に放り込んだオモチャのものだ。紗良が触れてしまっ

たのは、遠隔操作リモコンのスイッチだったらしい。

最悪なことに、触れた弾みで振動モードが入ってしまったのだ。

「……っ!？」

紗良が慌てて身体を起こすと、蓮の唇がゆっくりと離れた。

彼は動きを止め、怪訝そうに視線を下へ向ける。音の発生源は二人が座るソファの真下。

フローリングに直接響く、ぐぶぶぶぶ、という振動音は続いている。

「……紗良。この音、何？」

「あ、うーん、ええと……マッサージ機、かな……っ？」

「マッサージ機の音が、なんでソファの下から聞こえるんだよ」

蓮の顔から、すっと温度が消えた。

彼は紗良の太ももを跨ぐようにしてあつという間に組み伏せる。そうしてから、長い腕をソファの下へ伸ばし、床で激しく震えていたバイブを拾い上げた。

薄暗いリビングの明かりに照らされたのは、ぶるぶると震えているピンク色の機械だ。

「へーえ、マッサー、ジ機ねー」

蓮の瞳が、じわじわとサディスティックな歓喜と独占欲で濁っていく。蓮はゾツとするほど色っぽく笑った。

「こんなものでイこうとしてたなんて、いい度胸だな、紗良。俺じゃ不満だったってわけか。よくわかった」

「よく聞いて。もらい物だし、企画で使って欲しいという提案なわけで」

努めてビジネスっぽく聞こえるように言ったのだが、蓮はそれをわかっていて、紗良の身体をなぶる口実にしようとしている。

言い訳は重ねれば重ねるほど、上げ足を取られてしまうのが常だ。

「仕事で疲れてるんだな、紗良。マッサージなら俺も得意だからしてやるよ」

「ありがとう。わかったから、それ返して！」

「マッサージしなくちゃな」

蓮はリモコンのスイッチを押し、バイブの振動をさらに跳ね上げた。



「……っ、蓮、やめて、それ、おねがい……っ！」

ついさっきまで蓮が締めていた黒色のシルクのネクタイは、今は紗良の両手首を拘束していた。解けないけれど、痛くない絶妙さでガチガチに縛り上げられている。

「マッサージしてるんだから、やめても何もないだろ。気持ちいいと言え」

バイブはショーツ越しに秘部にあてがわれたまま、ブルブルとずっと震えていた。

蓮はそれを膝で器用に固定したまま、スーツを脱いでいく。

ジャケットを脱ぎ捨て、ワイシャツのボタンを一つずつ外していく蓮の太い指先。その扇情的な姿を、紗良は潤んだ瞳で見つめることしかできない。

そうして、たくましい筋肉が露わになっていく。

仕事終わりのわずかな汗とムスク系の香水が混ざり合い、理性を揺さぶるような香りが鼻腔に届い

た。

剥き出しになった蓮の肌が放つ熱に、紗良の身体は期待して芯から熱を帯び始めてしまう。

「ねえ！　こんなのマッサージじゃないじゃん！　お願い、蓮！」

「お願いも何も、これを使って自分一人で楽しもうとしてたんだろ？」

蓮はニヤリと唇を吊り上げると、紗良の服をまくり上げて胸を露わにする。

カチャカチャとベルトを外しながら胸の頂を口に含み、そしてバイブを秘豆に当てた。

ブウウウウ——！

「あ、ひゃうっ……！！」

濡れたショーツのせいで、振動が紗良の敏感な一点を容赦なく攻撃してきた。

蓮は嬉しそうな笑顔で、ボクサーパンツの内側からはみ出しそうになっている肉棒を秘部に押し付けてくる。

「あ、だめ、イっちゃうつ！」

紗良が弓なりに身体を反らせ、必死に逃げようとしても、蓮はバイブを押し当てたままにして来てやめない。

「や……あ……あ、ヤダヤダやめて、蓮、刺激強いから、やめてっ！」

痙攣が大きくなり、自分の意志では身体を止められないほどになってくる。すると、今度はショーツを剥ぎ取ってヌルヌルの割れ目にバイブを擦り付けられてしまった。

「よっぼど、このマッサージ機が気持ちいいみたいだな……俺が許すまで、気持ちよくし続けてやるよ」

絶頂の波が押し寄せ、まさにピークを迎えようとした瞬間。

蓮はリモコンを操作してピタリと振動を止めた。

幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる

番外編④

独占欲の檻 ～スーツの残香と秘密の玩具～



※画像はPixAIで作っています※